



Sally LEDGER and Holly FURNEAUX eds.,
Charles Dickens in Context
 (xxi+405 頁, Cambridge University Press,
 2011 年 6 月)
 ISBN: 9780521887007

(評) 甲斐清高
 Kiyotaka KAI

ディケンズ生誕 200 年を前に、2011 年、Paul Schlicke 編 *The Oxford Companion to Charles Dickens* (Oxford: Oxford UP) の記念エディションが出版された。1999 年に初版が出て以来 (元のタイトルは *The Oxford Reader's Companion to Dickens*)、ディケンズの参考書、手引書としては、現在まで最も評価の高いものであり、多くのディケンズファンが重宝しているだろう。その他にも、2001 年出版の John O. Jordan 編 *The Cambridge Companion to Charles Dickens* (Cambridge: Cambridge UP) や 2008 年出版 David Paroissien 編の *A Companion to Charles Dickens* (Oxford: Blackwell) といった Companion たちがすぐに頭に浮かぶが、それぞれ示唆に富み、役に立つ概説的な手引書である。そして、さらに Sally Ledger と Holly Furneaux 編の *Charles Dickens in Context* がこの知的宝庫に加わった。一流のディケンズ研究者たちが常に協力し、他の研究者や愛好家に知識を与え続けるという嬉しい状況だ。しかし、既になんか充実している感のある概説書の中で、新たに参入した *Charles Dickens in Context* の独自色、そしてその価値はどのようなものだろうか。

Charles Dickens in Context は 37 人もの研究者の協力によって書かれた 45 の章から成っている。本書に関して、ディケンズ・フェロウシップ日本支部として注目すべきはもちろん、支部長である佐々木徹先生がそのうち 2 つの章を担当していることだ。こうした概括的なディケンズ本の執筆陣の中に、日本やアジアという文脈とは関係なく名を連ねる支部長の活躍に、日本支部会員ひとりひとりが刺激されるにちがいない。佐々木先生の手による章のひとつ「20 世紀の主要な批評」では、様々な批評が整然とまとめられていて非常にありがたい。この章は、次のように締めくくられている: 20 世紀に引き続き、現在もディケンズは様々な批評を受け続けており、「ジェンダー、セクシュアリティ、帝国、人種、視覚文化、政治、経済、科学といった問題と関連して」ディケンズが研究される傾向

にある。そして、「ディケンズ産業」が繁栄し続けている (56-57)。これはまさに *Charles Dickens in Context* という本全体に関して言えることではないだろうか。書名からも明らかであるように、様々なコンテクストの中でディケンズを捉えるという現在の傾向を1冊の本という形にしたものであり、かつ、この本は多層的な意味で「ディケンズ産業」に関わっている。

まず、「ディケンズ産業」と本書の関係について考えてみたい。新たなディケンズ概説書として、その存在自体によってディケンズ産業の継続と肥大に貢献していることは言うまでもないが、本書の中には「ディケンズ産業」そのものに対する意識的な視点が見受けられる。タイトルからも「コンテクスト」を中心に行っていると予想される本書であるが、第2部の“Social and Cultural Contexts”より前に、“Life and Afterlife”と題されるセクションが来ている。この題のうち“Life”の部分はおそらく John Bowen による伝記的記述となる最初の二章を指し、他の章は“Afterlife”，すなわち、ディケンズが生前から現在まで残してきた遺産に目を向けている。Juliet John による「文化遺産産業」の章が最も特徴的に表しているように、ここに配置されているのは「ヴィクトリア朝の劇場版と盗作小説」，「ヴィクトリア朝定期行物におけるディケンズ論評」，「二十世紀の主要な批評」，「現代の劇場版」，「現代の映画版」，「文化遺産産業」，「ネオ・ヴィクトリア朝ディケンズ」，といったトピックを扱う章で、広範囲に亘る「ディケンズ産業」を、それぞれ簡潔に解説している。このセクションにある Michael Slater の章「ディケンズの人生 (“Dickens’s Lives”）」も、伝記の変遷の概説であり、「ディケンズ産業」への意識が強く見られる。Michael Hollington の章「ヨーロッパのコンテクスト」は、まず生前のディケンズが当時のヨーロッパとどう関わったかに少し触れているものの、ディケンズがどれだけヨーロッパの小説家に影響を与えているかにほとんどの頁を割き、特にスペインの作家ベニート・ペレス・ガルドスへの影響を詳しく述べている。

現代まで続く「ディケンズ産業」と、ディケンズが実際に生きたヴィクトリア朝社会の「コンテクスト」とは、次元の異なる問題ではないかと思えるが、ディケンズを現実世界の関わりの中で考えるという方向性は同じであろう。そして現在の「ディケンズ産業」の一部であるディケンズ批評がもっぱら「コンテクスト」に目を向けているという点、さらには、この小説家とヴィクトリア朝の社会との強い結びつきを考えると、「ディケンズ産業」と「コンテクスト」は必ずしも分けて考えることができないのかもしれない。「文化遺産産業」の章で Juliet John は、「ディケンズの遺産」と「ヴィクトリア朝の遺産」(あるいは「英国の遺産」) が区別せずに考えられる様について述べており (75)、また Holly Furneaux は序文の中で、ディケンズがヴィクトリア朝を代表する人物であり、ヴィクトリ

ア時代そのものと同一視される傾向がある、という点を強調する (xix).

本書の構成は、徹底的にヴィクトリア朝社会の「コンテクスト」に力点を置いたものである。第2部 “Social and Cultural Context” は全体の4分の3以上を占め、ここでは「コンテクスト」として多岐にわたるトピックが取り上げられている。扱われているのは、順に「大衆文化」、「セレブリティ文化の隆盛」、「新聞・定期刊行物市場」、「著述業・職業作家」、「演劇」、「メロドラマ」、「教養小説」、「視覚文化」、「歴史小説」、「挿絵付き小説」、「クリスマス」、「子供」、「仕事」、「ヨーロッパ」、「ヴィクトリア人とアメリカ」、「ヴィクトリア人の教育」、「ロンドン」、「政治」、「政治経済学」、「貴族」、「中流階級」、「都会への移住・移動」、「金融市場と銀行制度」、「帝国と植民地」、「人種」、「犯罪」、「法律」、「宗教」、「科学」、「交通・輸送手段」、「病気と社会衛生」、「家庭生活」、「セクシュアリティ」、「ジェンダー・アイデンティティ」、となっており、ヴィクトリア朝で特に注目されると思われる「コンテクスト」を十分にカバーしているのではないだろうか。それぞれの読者の関心の方向は様々であろうが、この中で何かしら自分の興味と重なるトピックに行き当たるにちがいない。

本書が他のディケンズ概説書と一線を画している最大の特徴のひとつは、この顕著な「コンテクスト」へのこだわりであろう。Paroissien の *A Companion to Charles Dickens* もコンテクストを重視する傾向を示しているが、本書ではそれがさらに徹底している。焦点が当てられているのは文学作品の中身ではなく、その外部にある現実の背景であり、ディケンズ概説書には必ず見られるような作品紹介や作品論のセクションは用意されていない。個々の作品の読みや解釈、テーマといったものは基本的な枠組みから外されている。また、他の概説書にはよく見られる「ディケンズと言語」といった類の項目も本書の対象外だ。言語、芸術、想像力といった小説家・芸術家ディケンズのテキストに起因するものはあえて周縁に置き、あくまでも外側にあるコンテクストを興味を中心に据える。短編小説、雑誌記事、手紙などでさえ、たびたび言及されるものの、それぞれ各章の論を補足するためであって、それらが独立して中心的に論じられる場所は設けられていない。

テキストの外側への指向は、ディケンズの生涯を扱っている章からも窺える。本書の最初に配置されている John Bowen 担当の伝記的記述は、唯一2章に分けられており、それぞれ「エレン・ターナン以前」と「エレン・ターナン以後」という章題が付けられている。ディケンズ58年の生涯を1857年、45歳あたりを境に区切っているわけだ。この分割が適切なものであるかどうかは議論の余地があり、決して本書においても一致した見解ではないが、ここに本書の方向性が見て取れるだろう。作品の特徴から『ディヴィッド・コパフィールド』あたりで

ディケンズの生涯を前期と後期に二分するのが一般的であると思われるが、あえてこれを拒否して、エレン・ターナンとの出会いの時期に訪れた大きな変化を強調しようという姿勢から、作品の外側にいるディケンズに焦点を当てようという方向性が見て取れる。ヴィクトリア朝のコンテクストをディケンズの人生との関わりにおいて解説する各章もまた、当然ながら伝記のような様相を帯びており、これらを読んでいくと、テキストの中にいる小説家ディケンズではなく、実際にこの時代を生きていた生身のディケンズの姿が浮かび上がってくる。

ただし、各章を詳細に見てみると、そのアプローチに必ずしも一貫性はなく、個々の執筆者にかなりの裁量が許されているようで、論じ方が一様ではない。トピックの性質の違いにかかわらず同じ長さにするという制約があるのも（各章は8-9頁程度の長さに統一するという体裁が取られている）その一因かもしれない。Jonathan Grossmanによる「交通・輸送手段」の章などは、扱っている問題の特殊な性質から当然期待されるとおり、基本的にほとんどがディケンズの体験した急速な交通手段の発達・変化に関する記述に終始しているが、他のトピックに関して言うと、8頁という分量ではそれぞれの問題を十分に論じ尽くせるものではないものの、単に事実関係の概略を紹介するだけではなく、各執筆者の個性を多少なりとも発揮する余裕がある、といったところだろうか。Schlicke編の*The Oxford Companion*の各項目が、主に事実をなるべく客観的に述べようとしているのに対し、*Charles Dickens in Context*の各章は、トピックの中の特殊な事項に重点を置いたり、個人の主張をかなり鮮明にしたりすることも多い。極端な例では、Francis O'Gormanによる「金融市場と銀行制度」の章など、当時の金融市場や銀行の状況を説明するのではなく、小説に登場する金融・銀行に関係する作中人物を取り上げて、後半はほとんど小さな『二都物語』論になっている。

執筆陣はそれぞれの立場をいくらか保ちながらそれぞれの項目について解説しているため、ちょっとした意見の対立なども見られて面白い。例えば、Grace Mooreは「帝国と植民地」の章で、インド大反乱に関して憤慨していたディケンズが後に考えを軟化させたと述べているが、そのすぐ後に続く「人種」の章では、Priti Joshiがその説にはっきり異議を唱える(298)。様々な立場の研究者が参加しているがゆえに複合的な視野が与えられ、全体として見るとダイナミックでバランスの取れた論集となっている。こうした視野の広さも本書の長所と言えよう。こうして章を跨いで読んでも、あるいは個々の章を別々に読んでも、そこから見えてくるのは、当時のコンテクストに対して積極的/消極的に関与しながら、矛盾や逡巡を抱えて揺れ動く人間ディケンズの姿なのではないだろうか。ディケンズによって代表される、あるいは彼と同一視されるこの時代そのものが、分裂や矛盾を孕んでいたのと同じように。

Charles Dickens in Context は、*The Oxford Companion* のように網羅的な情報を提供することを目的にしているわけではなく、特にディケンズとその時代に関して問題となるトピックを多く取り上げ、それぞれに解説を加えて読者に供することを目指している。Jordan 編の *The Cambridge Companion to Charles Dickens* や Paroissien 編の *A Companion to Charles Dickens* と較べてみると、各章は少し短い。これは何よりも概説書として読みやすさを意識しているためであろう。実際に読みやすい。その短さゆえに物足りない感があるかもしれないが、詳細な議論は本書の目指すところではない。巻末には各トピックに関する短い参考文献リストも挙げられていて、手引書としての機能も十分に備えている。そして各章は短くはあるが質の高いものである。8 頁程度の短い論というのは、そのトピックに関する簡単な知識を得るのに程良い長さなのかもしれない。私にはあまり馴染のないトピックも多々あるが、全体を最初から読み通しても、さほど苦勞を感じることもなく楽しめた。もちろんそれぞれの読者の目的に応じて必要な項目だけを取り上げて読んでも良いだろう。どのように接したとしても、*Charles Dickens in Context* の中に、すでに幅広く、そしてまだまだ成長する「ディケンズ産業」を実感することができるだろう。